

50人の自主的な参加と情報収集活動によって運営されていた。多くが実際子育て中の親であった。

- ・ また参加したいとする答えが48%あった。

#### 5. ITコミュニケーション

- ・ 日頃見ることができない保育園の状況が見守ることができてよかった 52%。
- ・ 保育の様子がわかり安心した 33%。
- ・ サービスを行うなら利用するが56%、是非必要だ27%。
- ・ 遊んでいる様子、保育園にいる間ずっとがそれぞれ39%。
- ・ どの時間帯が一番利用しやすいか 12:00～13:00が42%であった。

#### 6. メール相談

- ・ 17件の相談があった。
- ・ 11件までが公共施設の時間外、中でも深夜帯に多かった。

#### 7. ファミリーサポート

- ・ iモード導入前 利用申し込み3名5件(32日間)。
- ・ iモード導入後 利用申し込み7名8件(26日間)であった。
- ・ 閉館時間帯の利用が42%であった。

### D. 考察

ログ解析を行うことにより、市民のニーズ把握などが可能であった。ホームページアクセス件数は月平均3000件であった。インターネットを利用することは地理的、時間的、年齢的格差を超えコミュニケーションを図ることができる大きな利点がある。しかしハードウェアとしての施設、ソフトウェアとしての政策だけでなくそこに携わる担当者やサービス提供者がヒューマンウェアとなって機能しなければ、血の通ったサービスは成り立たない。ファミリーサポート事業ではコーディネーターにおいて、対面に対応している。また子育てコンビニなどは実際に保育中の親たちが中心となり、情報を発信している。

三鷹市のパーソナルコンピュータの普及率は屋久70%、インターネット普及率は60%である。ITは全ての人に開かれて入るが、一方在宅で子育てをしている若い母親を含め、インターネットへのアクセス環境に弱い市民もいることを忘れてはならず、窓口業務の充実や様々な形の広報活動も必要である。

実証実験を介してサービスの受給者である子どもと保護者、サービスの提供者である三鷹市職員、保育園保育士など子育てに関係する関係者、子育てコンビニに参加するボランティア市民などのコミュニケーションを深める機会ができたことは大きな成果であった。三鷹市役所(官)の中でのコミュニケーション、官と市民(ボランティア・民)そして民のなかでの仲間づくりのきっかけと促進に貢献した。

さらに子育て支援だけでなく、仲間づくりや就労などを含めた幅広い視点に立った複合的な子

育て支援、市民の仲間支援のものになった。この50人の保護者の母親が主体となり、パソコンを利用した「ポキ@パパママステーション」というプランを提案し、三鷹市とまちづくり三鷹の共催した「SOHO CITY 三鷹構想 ビジネスプランコンテスト」で特別賞を受賞し、情報提供→交流→仲間づくり→ビジネスと発展している。

インターネットは24時間窓口の役割を果たすことになる。情報を正確に伝達・把握することができ、連絡調整機能が格段に充実し、ファミリーサポート事業、メール相談などでは、マッチングや相談の継続性などに、迅速に、性格にサービスを提供することができた。ITの持つ地域的、時間的、制限のない迅速性、正確性が発揮できた。

保育園、幼稚園がそれぞれのホームページを作成する過程で、園長およびそれぞれの保育士一人一人が情報提供の利便性や重要性を認識するようになった。また、園でのパソコン末端の解放により、パソコン技術に長けた母親と保育士の新しい関係ができるなどの効用も生まれている。

メール相談は、面接相談より気軽に、精神的負担を感じずにできる利点がある。しかし相談事業にはその後のフォローが重要であり、必要があればできる限り早期に専門カウンセラーの支援が受けられるようなかん今日を整備する。また、相談者が交代しても、継続的な援助ができるシステムを構築することが必要である。

ファミリーサポートでは援助会員は利用会員と比較して高齢者が多く、インターネット利用ができない人もいる。コーディネーターは時間・場所の聞き違いがなく、気分的に楽であった。援助会員のスケジュール、住所、時間帯などの情報をデータベース化することにより、マッチングが楽にできるようになる。しかし、マッチングの迅速性、正確性、安全性を重視するだけでは、利用者である子どもや親の「気持ちや安心感」を置き忘れてしまいかねない。そこで、コーディネーターをおき、利用会員と援助会員のカップリング（3者面談）を行い、信頼関係を作り出すようにしている。そのため、見ず知らずの会員同士がマッチングされるということはない。

## VI. まとめ

三鷹市の行政としての子育て支援（目的性の高い行政情報）と市民参加による子育て支援・コンテンツ（身近な子育て情報）が、インターネットという媒体を通して、一元化し、一体化してインターネット上にサイトを構築できた。さらに「地域で子育てに関心を持つ」という状況を生み出すことができた

### 注

#### 注1 子育て支援に関するアンケート調査

地方版エンゼルプランの策定に伴い子育て家庭のニーズ調査のため、三鷹市が東京都とともに平成7年に実施した。就学前児童1200人、就学児童500人の保護者を住民基本台帳から無作為で抽出し、郵送により調査票を配布、回収した。回答率は就学前児童81.7%、就学児童54.0%でした。児童の保育況、両親の就労状況、育児の悩みや相談相手、子育て支援事業の利用状況を

主な調査内容とし、分析は市立保育園保育士らのプロジェクトチームが行なった。調査結果からは、子育て不安の広がり、密室の中の孤独な子育てなど、現在の育児状況が把握されたと同時に、乳幼児期の子育て支援施策の重要性、すべての子どもと家庭への支援の必要性、親自身の心の豊かさを視野に入れた幅広い施策の必要性、子育て支援ネットワークの要（かなめ）となる施設の必要性など今後の子育て支援の方向性が分析され、子ども家庭支援センターの開設や子どもの相談連絡会の拡充など、その後の三鷹市の子育て支援施策の展開と充実につながった。調査結果は、『子育てにやさしいまち・三鷹 をめざして』にまとめられた。

#### 注2 子ども家庭支援センター事業

東京都児童福祉審議会の提言に基づき平成7年度から開始された東京都独自の子育て支援事業である。実施主体は区市町村で運営費の一部を東京都が補助している。子育てひろば（保育園、児童館が行う軽易な相談）と児童相談所（一時保護や施設入所など法的対応と専門的指導援助）の中間に位置し、子どもと家庭に関するあらゆる問題についての総合相談、援助の実施、サービスの提供と調整等を行う他、地域における子ども家庭支援ネットワークの拠点としての役割を担うこととされています。東京都では人口10万人に1ヶ所程度の整備を目指しています。平成12年現在で、三鷹市の他、都内14の区市が設置しています。

#### 注3 子どもの相談連絡会

子どもと家庭にかかわる諸機関の連絡会議である。子ども家庭支援センターが所掌し、北野ハピネスセンターくるみ幼児園園長、早期発見早期療育ケースワーカー、保健センター保健師、市立保育園園長・保健担当・栄養士、児童館児童厚生員、生活保護担当ケースワーカー、社会教育会館保育士、母子生活支援施設少年指導員、杉並児童相談所児童福祉司、三鷹武蔵野保健所保健師など、普段から実際に子どもと家庭にかかわっている三鷹市と東京都の関係機関のスタッフにより構成されている。毎月1回の定例会では情報交換だけでなく、個別の事例についても具体的な支援方法や連携の方策を検討している。また、児童虐待問題などの研修会も定期的におこなっている。

子どもの相談連絡会は平成2年に保育園の相談事業を母体にして始まった。平成7年に市が実施した「子育て支援に関するアンケート調査」の分析から子育て支援ネットワークの要（かなめ）となる施設の必要性が認識され、平成9年、子ども家庭支援センターが開設されたのを機会に、新たに児童相談所を加えるなど拡充を図り子ども家庭支援センター条例に基づき設置された経緯がある。

#### 注4 「介護・子育て分野における革新的なサービス提供に資するIT活用事業」

通商産業省の委託を（財）ニューメディア開発協会が受け平成13年1月に公募した事業。この事業の目的は、少子高齢化、女性の社会進出が進む中で、高齢者の健康寿命を伸ばし、生活をサポートする介護サービス、これまで家庭内で行われてきた保育・介護をサービスの需要が高まっていることを背景に、これらのニーズの拡大に応じて多様なサービスの提供が、民間の活力、地域の既存資源を最大限活用した形で、的活かつ効率的に提供されていくためには、昨今のITの進歩を活用した革新的なサービス提供体制やサービス利用者との新しい関係の構築が求められる。

これら介護および子育て分野においてITを活用し、より効率的・効果的な情報提供、サービスの生産性向上と質の高いサービス提供の実現、利用者の利便性の飛躍的な向上を目指し、情報システムの開発および実証実験を支援する。

#### 注5 中心市街地活性化事業

空洞化が進行している中心市街地の活性化を図るために、一定のエリアを指定し、地域の創意工夫を活かしつつ市街地の整備改善および商業などの活性化の一体的推進を総合的に実施する事業である。

近年地域の経済および社会の発展にとって重要な働きを果たすべき年の中心市街地の空洞化が目立ってきている。この背景には①合理的、有効な土地活用がなされていないことによる都市機能の低下、②モータリゼーションの普及を背景にした車によるアクセスの相対的悪化、③多様化、高度化する消費者ニーズや時間消費空間へのニーズに十分対応できない商業集積などがあげられている。中心市街地が抱えるこれらの問題を人・物・金・情報の交流を活性化することによって改善し、①快適かつ文化的な生活空間の実現、②高齢者の住みやすい街づくり、③新たな事業機会の苗床、④効率的な投資と経済活動の実現、⑤環境調和型の社会への対応の達成などが重要な柱となっている。

#### 注6 まちづくり三鷹（株）

中心市街地活性化法に基づき1998年に「特定会社」として、三鷹市と地域企業・大学・市民が一緒になり、まちづくりを進める主体として設立された。これまでの既存の枠を越え、民間の柔軟性とスピードを、加えて自治体の公共性と公平を兼ね備えたまちづくり機関として事業展開をしている。

三鷹市では基本的なまちづくりの目標に

「高環境、高福祉のまちづくり」を掲げ、住むだけでなく、暮らし、学びそして働く場所として、自立し真に豊かで活力ある地域を目指している。

- 1 新たな産業の創出
- 2 SOHO CITY みたか構想の推進
- 3 魅力ある中心市街地の再生
- 4 地域活性化事業の展開
- 5 コミュニティー事業への支援
- 6 地域にやさしいネットワークづくり

#### 参考文献

株式会社まちづくり三鷹 地域全体による子育て支援ネットワークの構築及び実証 平成13年4月

株式会社まちづくり三鷹 地域全体による子育て支援ネットワークの構築及び実証 調査研究報告書 平成14年2月

## 育児不安の規定要因に関する研究

分担研究者 星 且二 東京都立大学都市研究所教授  
研究協力者 渡部月子 東京都立大学都市研究所大学院

四ヶ月児を持つ母親を調査対象として、育児不安の実態と育児不安を規定する要因を明確にする調査目的でアンケート調査を実施した。母親 945 人を調査対象として、基礎集計と共に共分散構造分析を用いて解説した。

その結果、各潜在変数間の関連を標準化推定値でみると、（育児サポート：（）は潜在変数を示す）は、（育児不安）を直接にはほとんど規定せず、（自己肯定感）と（育児認識と自信）をやや規定し、潜在変数（育児不安）は、そのほとんどが（育児認識と自信）から規定されていた。以上より、育児不安を少なくするためには、母親の自己肯定感を高め、育児認識をポジティブな視点で捉え、同時に育児する上での自信を高めることが最も効果的である可能性が示唆された。

潜在変数（育児・育自分）は、そのほとんどが、（育児認識と自信）から規定されていた。よって、育児・育自分を推進させていくためには、母親の自己肯定感を支援し、育児認識をポジティブな視点で捉え、同時に育児する上での自信を高めていく重要性が示唆された。

潜在変数（育児サポート）は、（育児対処行動）に対して少々規定していた。よって育児対処行動を推進させていくためには、育児サポートを強化していく重要性が示唆された。

見出語 育児サポート 育児不安 自己肯定感 育児グループ

### A. 調査目的

最愛である我が子を虐待せざるを得ない事例が数多く報告され、育児不安や育児ノイローゼに対する育児支援への関心が高まっている。しかしながら育児不安の背景要因ないし因果要因は、必ずしも明確になっているわけではない。

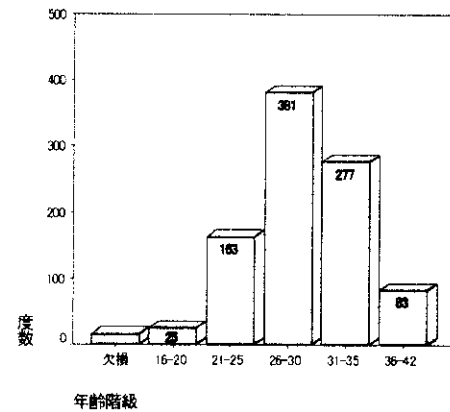
ここでの研究目的は、四ヶ月児を持つ母親を調査対象として、育児不安の実態を明確にすると共に、育児不安を規定する要因を明確にし、支援方策を検討する基礎資料を得ることを調査目的とした。

### B. 調査方法

調査対象は、全国五つの市町村で実施している乳児健康診査を受診した母親 945 人とした。調査方法は、自記式によるアンケート調査とした。

## B-1. 分析対象の年齢階級別分布

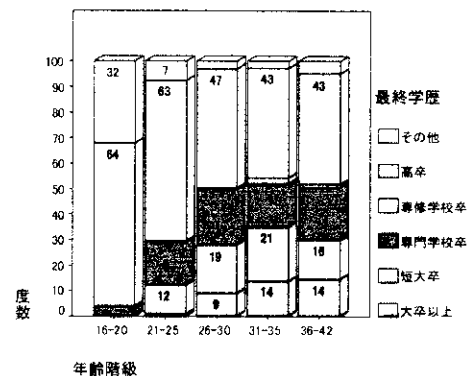
調査対象者の年齢分布を図に示した。25-29 歳代が最も多く 331 名であった。平均年齢は、29.3 ± 4.5 であった。年齢が不明は、16 名であった。



## B-2. 最終学歴の年齢階級別分布

最終学歴について、「あなたの最終学歴は次のどれですか」とし、1. 大卒以上、2. 短大卒、3. 専門学校卒、4. 専修学校卒、5. 高卒、6. その他を選択肢として質問した。

調査対象者の年齢階級別にみた学歴は、加齢と共に高学歴の割合が増加していた。



## C. 調査結果

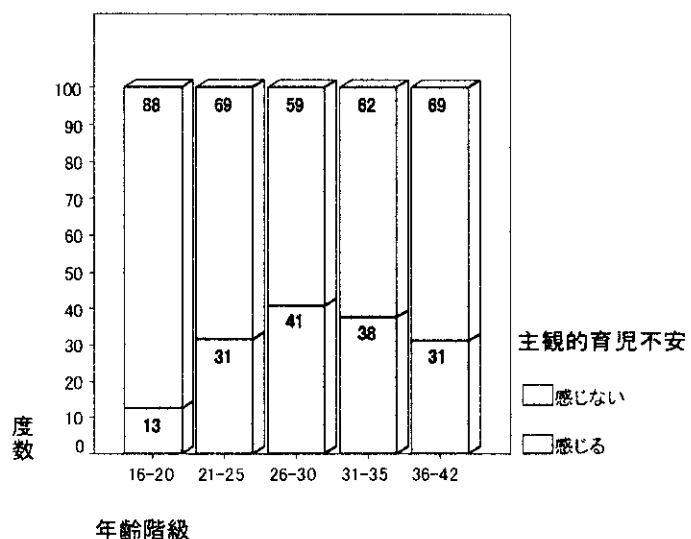
育児不安や育児認識ないし対処行動の実態を年齢階級別にみることと共に、それらの関連要因について、因子分析結果に基づき共分散構造分析による調査結果を示した。

### C-1. 育児の実態

#### 1) 育児不安感の年齢階級別分布

主観的にみた育児不安感について、「現在、育児に不安を感じていますか」に対する選択肢を、1. 感じる、2. 感じない、3. どちらともいえないの選択肢で質問した。

主観的にみた育児不安を感じる割合は、30 歳代までは、加齢と共に増加する傾向を示した。その後は、加齢と共にやや少なくなる傾向を示した。図は、ど



ちらでもないとする選択肢を除いた割合を示している。

一般的にみれば、高学歴ほど主観的にみた育児の不安感がより少なくなる傾向を示し Kendall の外では、統計学的にみて有意差がみられた。

### 最終学歴と主観的育児不安の関連

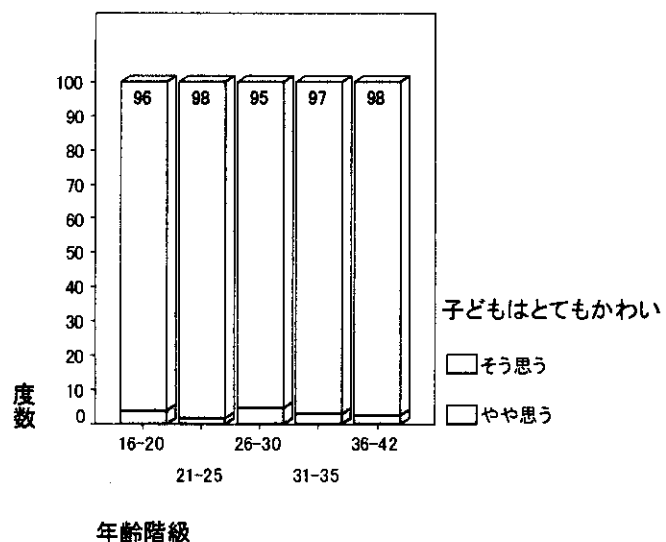
最終学歴	主観的育児不安		合計
	感じる	感じない	
大卒以上	11	27	38
	28.9%	71.1%	100.0%
短大卒	27	38	65
	41.5%	58.5%	100.0%
専門学校卒	19	42	61
	31.1%	68.9%	100.0%
専修学校卒	2	3	5
	40.0%	60.0%	100.0%
高卒	70	102	172
	40.7%	59.3%	100.0%
合計	129	212	341
	37.8%	62.2%	100.0%

### 2) 子供がかわいいことの年齢階級別分布

子供がかわいいと認識する事について、「子どもはとてもかわいい」の質問に対して、そう思う、やや思う、あまり思わない、思わないの選択で質問した。

子供がとてもかわいいとする割合は、年齢階級別に較差がみられなかった。

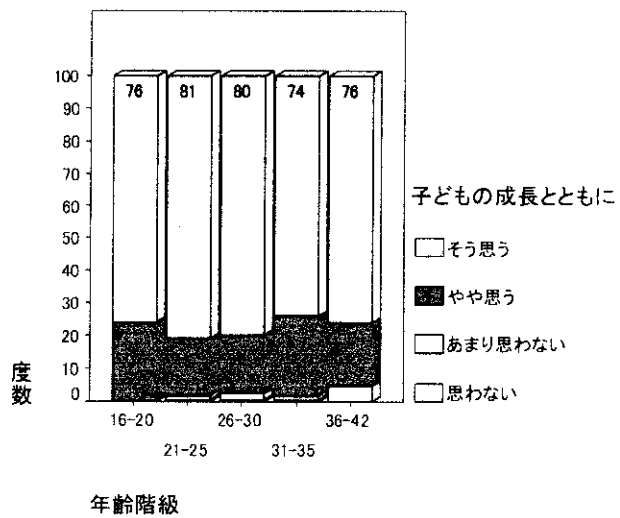
いずれの年齢でも、とてもかわいいとする割合が、95%を越えていた。



### 3) 子供と共に親も成長することと年齢階級別分布

子どもの成長とともに自分も成長する事について、「子どもの成長と共に、自分も成長する」に対して、そう思う、やや思う、あまり思わない、思わないの選択肢で質問した。

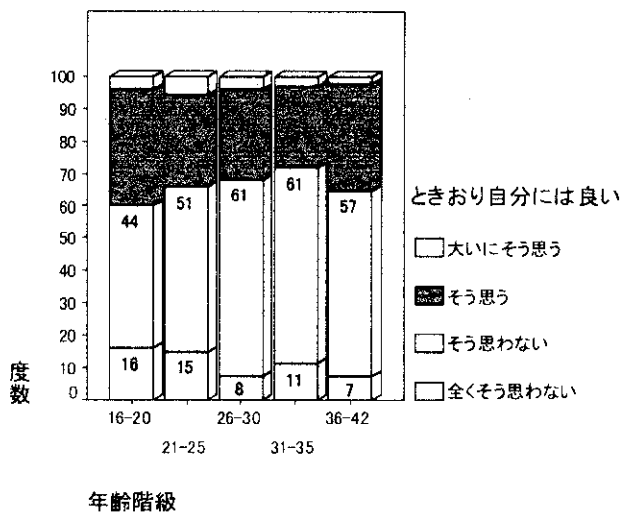
その割合は、年齢階級では較差がみられなかった。しかしながら、35歳以上では、思わない割合がやや多いことが示された。



#### 4) 自分の自己評価の年齢階級別分布

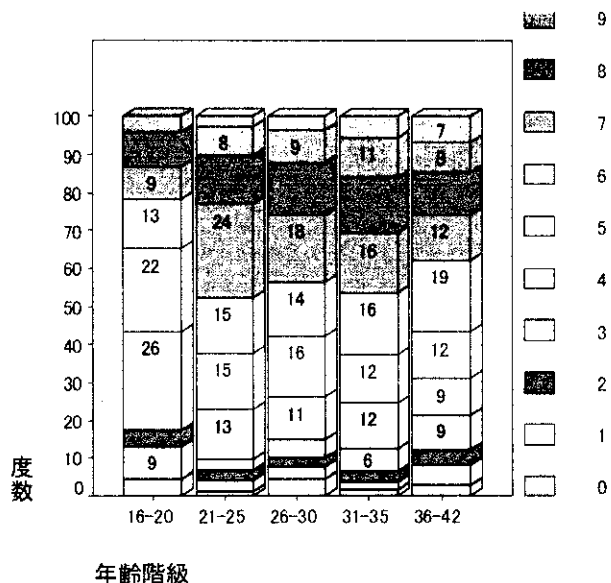
育児の自己評価として、「ときおり、自分には良いところが全くないように思える」の質問に対し、全く思わない、思わない、思う、大いに思うの選択肢で質問した。

自分には良いところが全くないに対して、「大いにそう思う」「そう思う」とする割合が36歳以上を除き、加齢と共に少なくなる傾向を示した。



#### 5) 夫の支援数の年齢階級別分布

育児をする上での夫の支援数を、「支援数がどのぐらいありますか」と質問した。育児をする上での夫の支援数は、若年の母親と36歳以上の母親では、他の年齢群に比べてその数がやや少ない傾向を示した。

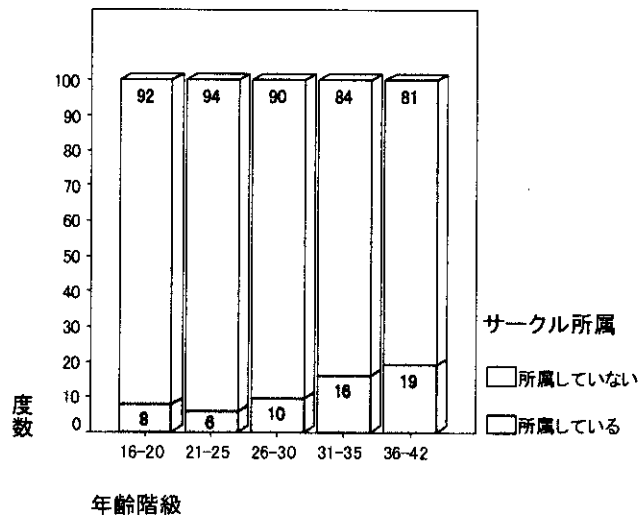




### 6) サークル所属の年齢階級別分布

育児のサークル所属について、「現在、趣味・習い事・スポーツなどのグループに所属していますか」と質問した。

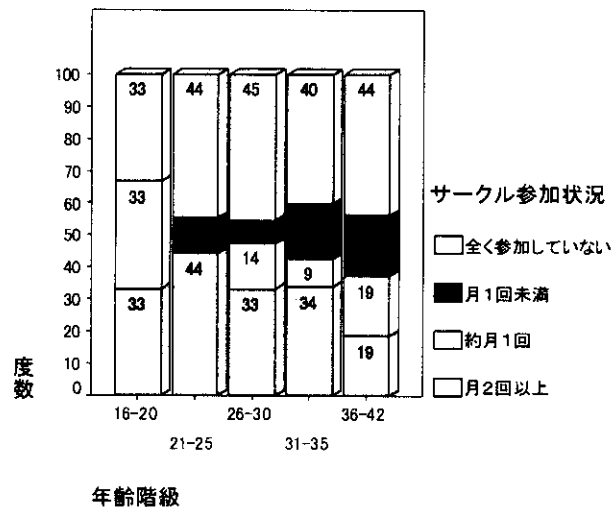
グループに所属する割合は、母親の年齢が増加するに従ってその割合が増加する傾向を示した。



### 7) サークル参加頻度の年齢階級別分布

育児サークル参加状況について、「現在、趣味・習い事・スポーツなどのグループに所属していますか」について月別の頻度を質問した。

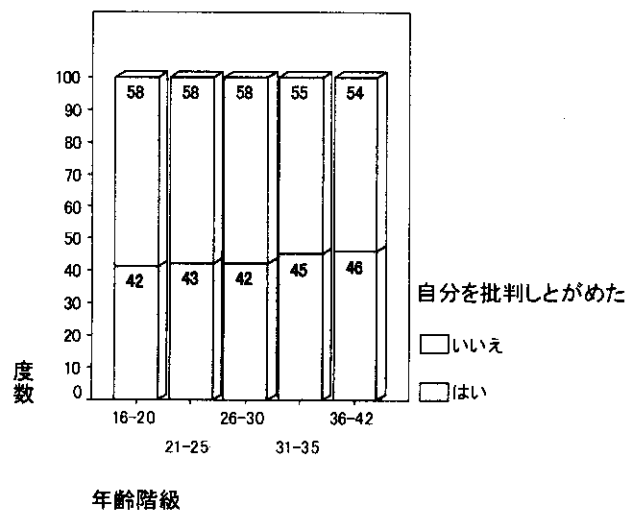
母親の年齢が 21-25 歳群で最も多い頻度を示した。母親の年齢が増加するほど、月別にみた頻度が少なくなる傾向を示した。



### 8) 自己批判の年齢階級別分布

育児の自己評価として、「自分を批判し、とがめた」の有無について質問した。

自分を批判してとがめたとする割合は、加齢と共にやや多くなる傾向を示した。自分の育児態度を批判してとがめる傾向は、加齢共にほんの少々だが増加する傾向がみられた。



### C-1. 育児の関連要因の因子分析

因子分析を実施し、五つの主要要因を抽出した。

	1	2	3	4	5
自分うまくいかな人間に思える	<b>.805</b>	-.176	-.252	-.336	.120
ときおり私は自分は役立たずだ感	<b>.797</b>	-.095	-.219	-.226	.139
ときおり自分には良いところない	<b>.762</b>	-.348	-.376	-.294	.310
もっと自分に尊敬の念をもつ	<b>.712</b>	-.146	-.133	-.121	.064
私にはあまり誇るべきことがない	<b>.699</b>	-.210	-.470	-.445	.143
自分自身に対して前向きな姿勢	<b>-.632</b>	.106	.580	.285	-.185
自分の立場を貫き望む努力した	<b>.476</b>	-.162	-.217	.076	.243
なるようになれと開き直った	<b>-.419</b>	.073	.114	-.156	.357
子どもを育てることが負担に感じられる	<b>-.327</b>	.223	.052	-.087	.015
子どものことが煩わしくてイライラする	.025	<b>.733</b>	.240	.016	.027
母として不適格と感じる	-.247	<b>.731</b>	.116	.113	-.358
子育ては辛く苦勞が多い	.379	<b>-.730</b>	-.220	-.140	.133
子どもを虐待しているのではないか思う	-.051	<b>.712</b>	.354	.181	-.037
イライラすることが多い	-.165	<b>.710</b>	.458	.245	-.133
子どもどのように接するかわからず	.267	<b>-.674</b>	-.056	.040	.409
子どもをうまく育てている	.181	<b>-.481</b>	-.401	-.102	.331
育児に自信がもてない	-.355	<b>.474</b>	-.068	.295	-.350
育児に追われて自分のしたいできない	.316	<b>-.421</b>	-.293	-.325	-.032
自分を批判しとがめた	-.357	<b>.378</b>	-.102	.185	.135
サークル参加状況	.307	<b>.327</b>	.062	-.166	.078
子どもはとてもかわいい	-.223	<b>.307</b>	.213	-.274	-.084
自分には良いところがたくさんある	-.507	.375	<b>.755</b>	.262	-.292
他の人と同じくらい価値ある人間	-.524	.271	<b>.731</b>	.276	-.272
人と同じ程度に私もできる	-.520	.222	<b>.705</b>	.185	-.007
子どもの成長とともに自分も成長する	-.156	.202	<b>.511</b>	.005	.015
信頼できる人に助言求め、従った	.087	-.051	<b>-.457</b>	-.147	-.040
夫のサポート数	-.176	.273	.344	<b>.735</b>	-.139
手段的サポート数	-.209	.091	.130	<b>.729</b>	-.053
情緒的サポート数	-.396	.184	.404	<b>.566</b>	-.314
子どもは楽しみや生きがいである	.191	-.031	.378	<b>-.407</b>	.029
物事の明るい面をみようとした	.268	-.099	-.158	-.170	<b>.781</b>
得意なことをして自信回復充実感を味	.040	-.434	-.345	.099	<b>.666</b>
事態が好転することを願った	-.037	-.302	-.382	.294	<b>.423</b>
現在育児に不安を感じている	-.119	.101	-.140	.014	<b>-.355</b>
サークル所属	-.092	.120	.162	-.058	<b>.346</b>

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

因子分析の結果、各因子の特性を以下のようにまとめた。第一因子は、「ときおり、私は自分が役立たずだと感じる」、「だいたい自分は何をやってもうまくいかない人間のように入る」、「ときおり、自分には良いところが全くないように入る」に代表されるような〔自己批判的評価〕として分類されると言える。

第二因子は、「子どものことが煩わしくてイライラする」、「母として不適格と感じる」、「子育ては辛く苦勞が多い」、「子どもを虐待しているのではないか思う」、「子どもどのように入るかわからず」、「育児に自信がもてない」に代表されるような〔育児認識と育児不安〕として分類されると言える。

第三因子は、「自分には良いところがたくさんある」、「他の人と同じくらい価値ある人間である」、「人と同じ程度に私もできる」、「子どもの成長とともに自分も成長する」に代表されるような〔自己肯定的評価〕として分類されると言える。

第四因子は、「夫のサポート数」、「手段的サポート数」、「情緒的サポート数」に代表されるような〔育児支援ネットワーク〕として分類されると言える。「子どもは楽しみや生きがいである」とする育児認識がここに分類された。

第五因子は、「物事の明るい面をみようとした」、「得意なことをして自信回復充実感を味わった」、「事態が好転することを願った」に代表されるような〔育児課題解決方法〕として分類されると言える。「現在、育児に不安を感じている」「サークル所属」とする育児不安と育児支援ネットワークである質問がここに分類された。

## C-2. 育児の関連要因の共分散構造分析

ここでは、因子分析で分類された要因を基盤として、1) 育児不安規定要因モデル、2) 育児・育自分規定要因モデル、3) 育児課題対処行動規定要因モデルを設定し、共分散構造分析によって分析した結果を示す。

### 1) 育児不安規定要因関連モデル

#### 1-1) 育児不安規定要因関連仮説の設定

育児不安規定要因に関する観測変数と潜在変数との関連は、因子分析を経て以下のようにした。

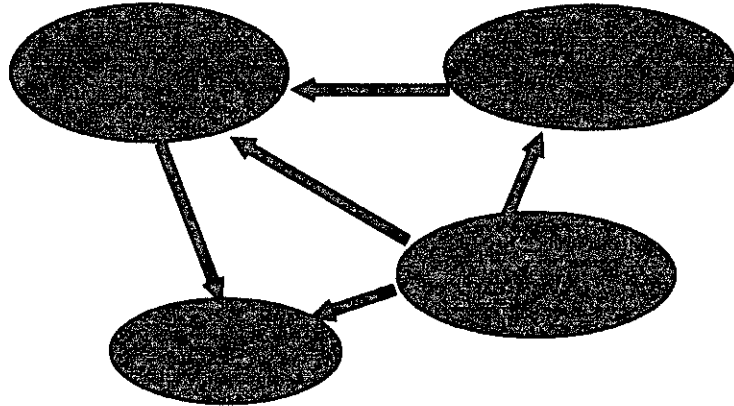
「現在、育児に不安を感じている」「子どもを虐待しているのではないか思う」「他人と孤立している」を観測変数とする潜在変数の命名を「**育児不安**」とした。

「子どものことが煩わしくてイライラする」「母として不適格と感じる」「子育ては辛く苦勞が多い」を観測変数とする潜在変数の命名を「**育児認識と自信**」とした。一方、それらを支える支援環境として、「夫のサポート数」「手段的サポート数」「情緒的サポート数」「サークル所属」を観測変数とする潜在変数の命名を「**育児サポート**」と命名した。

「自分には良いところがたくさんある」「他の人と同じくらい価値ある人間である」「人と同じ程度に私もできる」を観測変数とする潜在変数の命名を「**自己肯定感**」とした。

四つの潜在変数の中で、育児不安を外生変数として、育児不安規定要因モデルの関連を図のように設定した。育児を支援するサポートが、育児の自己肯定感を高め、次の育児認識と育児に対する自信を高める事につながり、結果的に育児不安を低減化させるであろうという仮説モデルである。

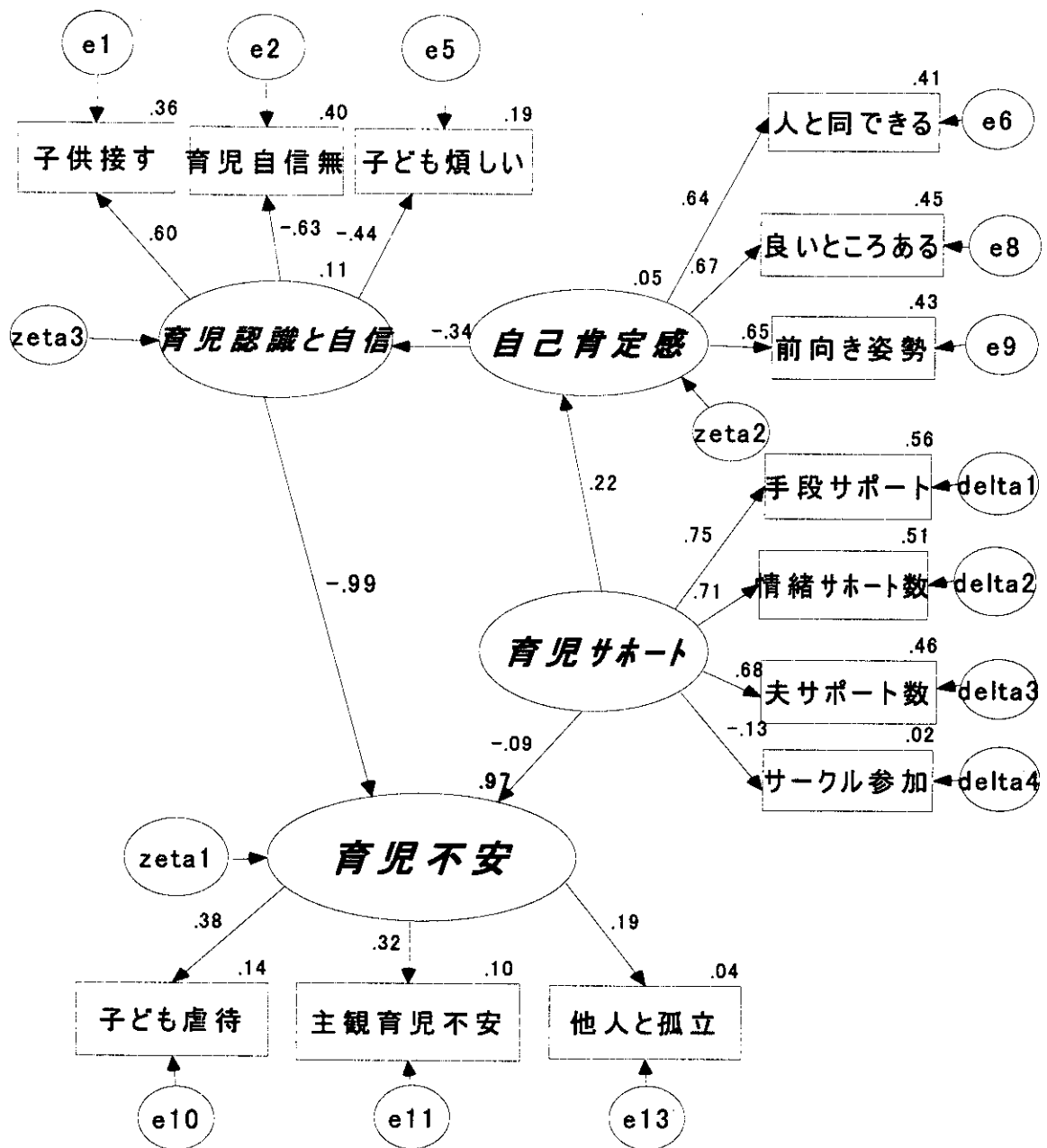
## 育児不安規定要因モデル



### 1-2) 育児不安規定要因モデルの標準化推定数

育児不安規定要因モデルに基づいて分析した。適合度が最も高かったモデル図を以下に示す。このモデルの適合度は、NFI が 0.886、RMSEA が 0.044 と高い適合度が得られた。

図 1-3 育児不安規定要因モデル共分散構造分析



NFI=0.886 RMSEA=0.044

### 1-3) 育児不安規定要因モデル分析結果の解釈

最も高い適合度が得られたのが、図 1-3 である。NFI は 0.886 で、RMSEA は、0.044 であったことから、高い適合度が得られたと解釈した。

図 1-3 に基づいて、育児不安規定要因を以下のように解釈した。潜在変数（育児サポー

ト：以下潜在変数は（）で示す）は、主として、「夫のサポート数」、「手段的サポート数」、「情緒的サポート数」によって構成されていた。自主グループへの所属は、小さい標準化推定値しか得られなかった。

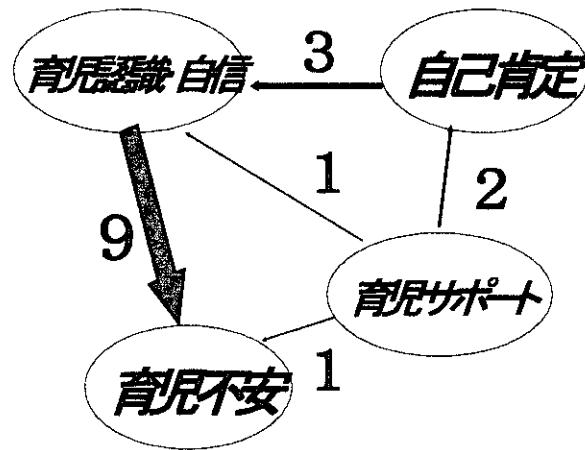
## 育児不安規定要因モデル

潜在変数（自己肯定感は、主として、「自分には良いところがある」、「前向きな姿勢で望んでいる」、「人と同じように出来る」という観測変数で構成されていた。

潜在変数（育児認識と自信）は、主として「育児に自信がある」、「子どもどのように接するかわからず」によって構成されていた。

潜在変数（育児不安）は、

主として「子どもを虐待しているのではないか思う」、「育児に不安を感じる」によって構成されていた。



各潜在変数間の関連を標準化推定値でみると、（育児サポート）は、（育児不安）を直接にはほとんど規定せず、（自己肯定感）をやや規定していた。（育児認識と自信）は、（自己肯定感）からやや規定されていた。潜在変数（育児不安）は、そのほとんどが、（育児認識と自信）から規定されていた。

以上の分析結果から見て、育児不安を少なくするためには、母親の自己肯定感を高め、育児認識をポジティブな視点で捉え、同時に育児する上での自信を高めていくことが最も効果的である可能性が示唆された。

ただし、このような可能性を実証していくためには、このような支援活動を続けることによる支援効果を明確にしていく実証的な介入追跡調査研究が不可欠だと考えられる。図に示した矢印の太さは、共分散構造分析の標準化推定値の大きさを示している。数字は、標準化推定値を10倍した絶対値を示している。

## 2) 育児・育自分規定要因モデル

### 2-1) 育児・育自分規定要因関連仮説の設定

育児・育自分規定要因に関する観測変数と潜在変数との関連は、因子分析を経て以下のようにした。ここで用いる育自分は、「Family development」の日本語訳で、育児経過を通して親も成長すること示す造語である。

「子どもの成長とともに自分も成長する」「子どもは楽しみや生きがいである」を主要な観測変数とする潜在変数の命名を「育児と育自分」とした。「子どものことが煩わしく

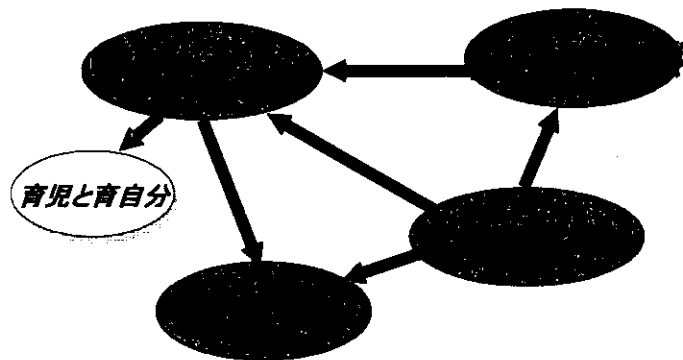
てイライラする」「母として不適格と感じる」「子育ては辛く苦勞が多い」を観測変数とする潜在変数の命名を「**育児認識と自信**」とした。一方、それらを支える支援環境として、「夫のサポート数」「手段的サポート数」「情緒的サポート数」を観測変数とする潜在変数の命名を「**育児サポート**」と命名した。「自分には良いところがたくさんある」「他の人と同じくらい価値ある人間である」「人と同じ程度に私もできる」を観測変数とする潜在変数の命名を「**自己肯定感**」とした。

育児を担当する親が、育児の課題に適切に対応し、同時に楽しくかつ自分たちも育っていく（Family development）という概念を、**育児・育自分モデル**として仮説的に設定した。

このモデルでは、外的な潜在変数「**育児と育自分**」は、育児過程で出会う様々な育児課題に対し、個々人の「**自己肯定感**」を背景に「**育児支援ネット**」基盤を

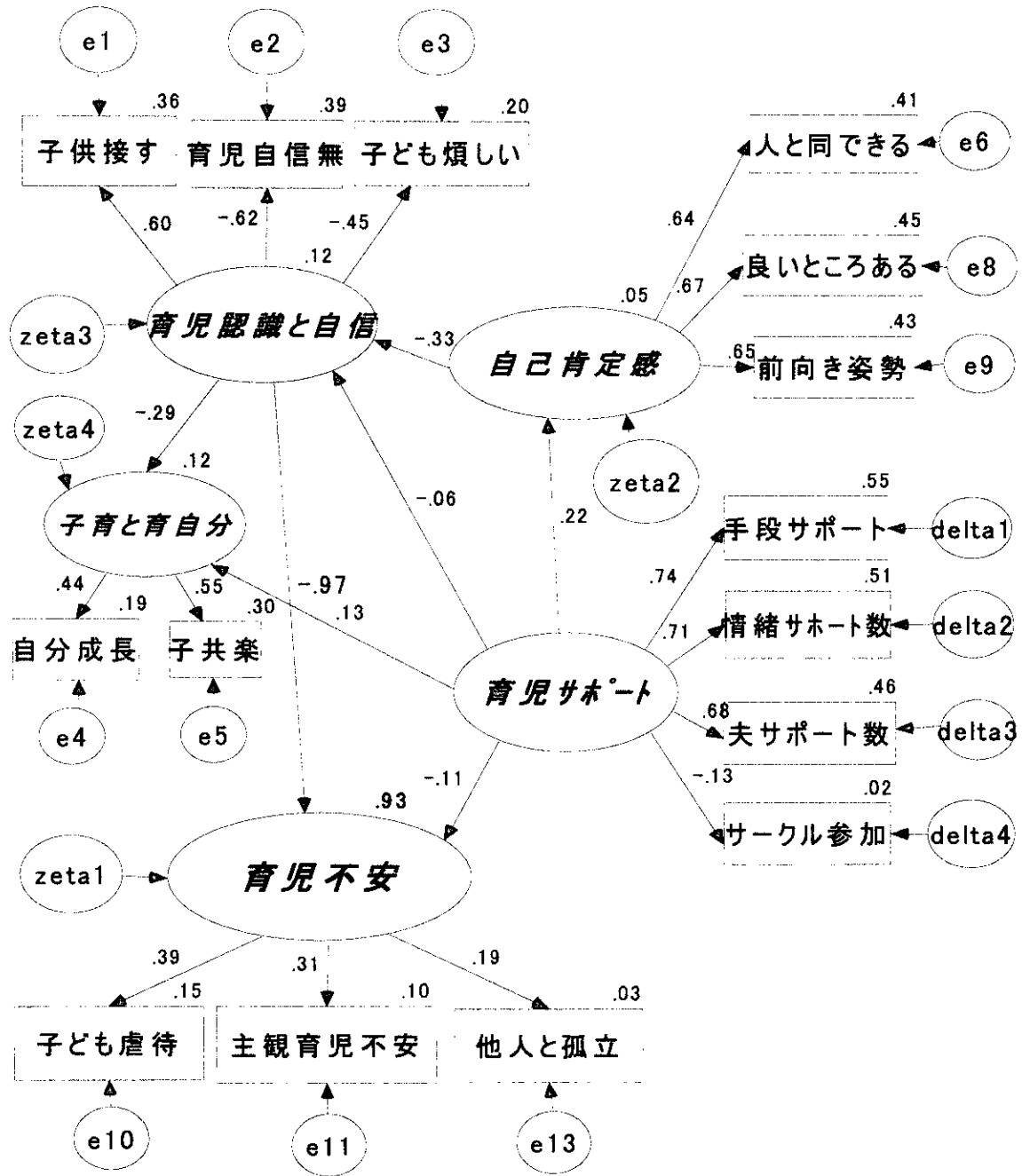
活用し、好ましい「**育児認識・自信**」によって規定されるという仮説モデルである。**育児・育自分モデル**を図のよう

## 育児・育自分モデル



## 2-2) 育児・育自分規定要因モデルの標準化推定数

育児・育自分規定要因モデルに基づいて分析した。適合度が最も高かったモデル図を以下に示す。このモデルの適合度は、NFIが0.871 RMSEA=0.043と高い適合度が得られた。



NFI=0.871 RMSEA=0.043



## 2-3) 育児・育自分規定要因モデル分析結果の解釈

各潜在変数と観測変数との関連を得られた標準化推定値によって、以下のように解釈した。

潜在変数（育児サポート）は、主として、「夫のサポート数」、「手段的サポート数」、「情緒的サポート数」によって構成され、育児サークル参加より大きな標準化推定値を示した。

潜在変数（自己肯定感）は、主として、「自分には良いところがある」、「前向きな姿勢で望んでいる」、「人と同じように出来る」という観測変数で構成されていた。

潜在変数（育児認識と自信）は、主として「育児に自信がある」、「子どもどのように接するかわからず」によって構成されていた。潜在変数（育児不安）は、主として「子どもを虐待しているのではないか思う」、「育児に不安を感じる」によって構成されていた。潜在変数（育児・育自分）は、主として「子供と共に親も育つ」「子供を育てるのが楽しい」によって構成されていた。

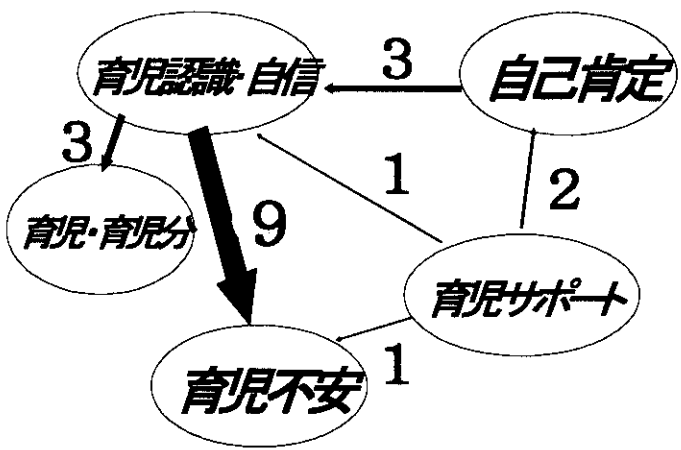
各潜在変数間の関連をみると、（育児サポート）は、（育児不安）をほとんど規定せず、（自己肯定感）をやや規定していた。（育児認識と自信）は、（自己肯定感）からやや規定されていた。潜在変数（育児・育自分）は、そのほとんどが、（育児認識と自信）から規定されていた。

以上分析結果から見て、育児・育自分という考え方を推進させていくためには、母親の自己肯定感を支援するとともに、育児認識をポジティブな視点で捉え、同時に育児する上での自信を高めていくことの重要性が示唆された。

このような仮説を実証していくためには、このような支援活動を続けることによる支援効果を明確にしていく実証的な介入追跡調査研究が必要だと考えられる。図に示した矢印は、共分散構造分析の標準化推定値の大きさを矢印の太さで示した。数字は、標準化推定値を10倍した数字の絶対値である。

このように仮説を実証していくためには、このような支援活動を続けることによる支援効果を明確にしていく実証的な介入追跡調査研究が必要だと考えられる。図に示した矢印は、共分散構造分析の標準化推定値の大きさを矢印の太さで示した。数字は、標準化推定値を10倍した数字の絶対値である。

# 育児・育自分規定要因モデル



## 3) 育児課題と育児対処行動規定要因モデル

### 3-1) 育児課題と対処行動規定要因関連仮説の設定

育児課題と育児対処行動規定要因に関する観測変数と潜在変数との関連は、因子分析を

経て以下のようにした。

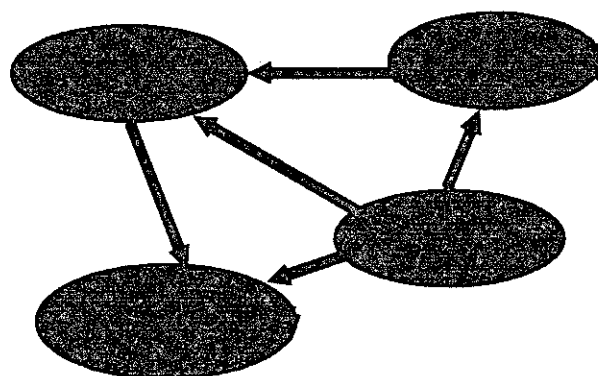
「信頼できる人に助言を求め、それに従った」「事態が好転する事を願ったり、空想した」を観測変数とする潜在変数の命名を「**育児対処行動**」とした。

「子どものことが煩わしくてイライラする」「母として不適合とを感じる」「子育ては辛く苦勞が多い」を観測変数とする潜在変数の命名を「**育児認識と自信**」とした。一方、それらを支える支援環境として、「夫のサポート数」「手段的サポート数」「情緒的サポート数」を観測変数とする潜在変数の命名を「**育児サポート**」と命名した。「自分には良いところがたくさんある」「他の人と同じくらい価値ある人間である」「人と同じ程度に私もできる」を観測変数とする潜在変数の命名を「**自己肯定感**」とした。

育児を担当する親が、育児の課題に適切に対応していくという概念を、**育児対処行動モデル**として仮説的に設定した。

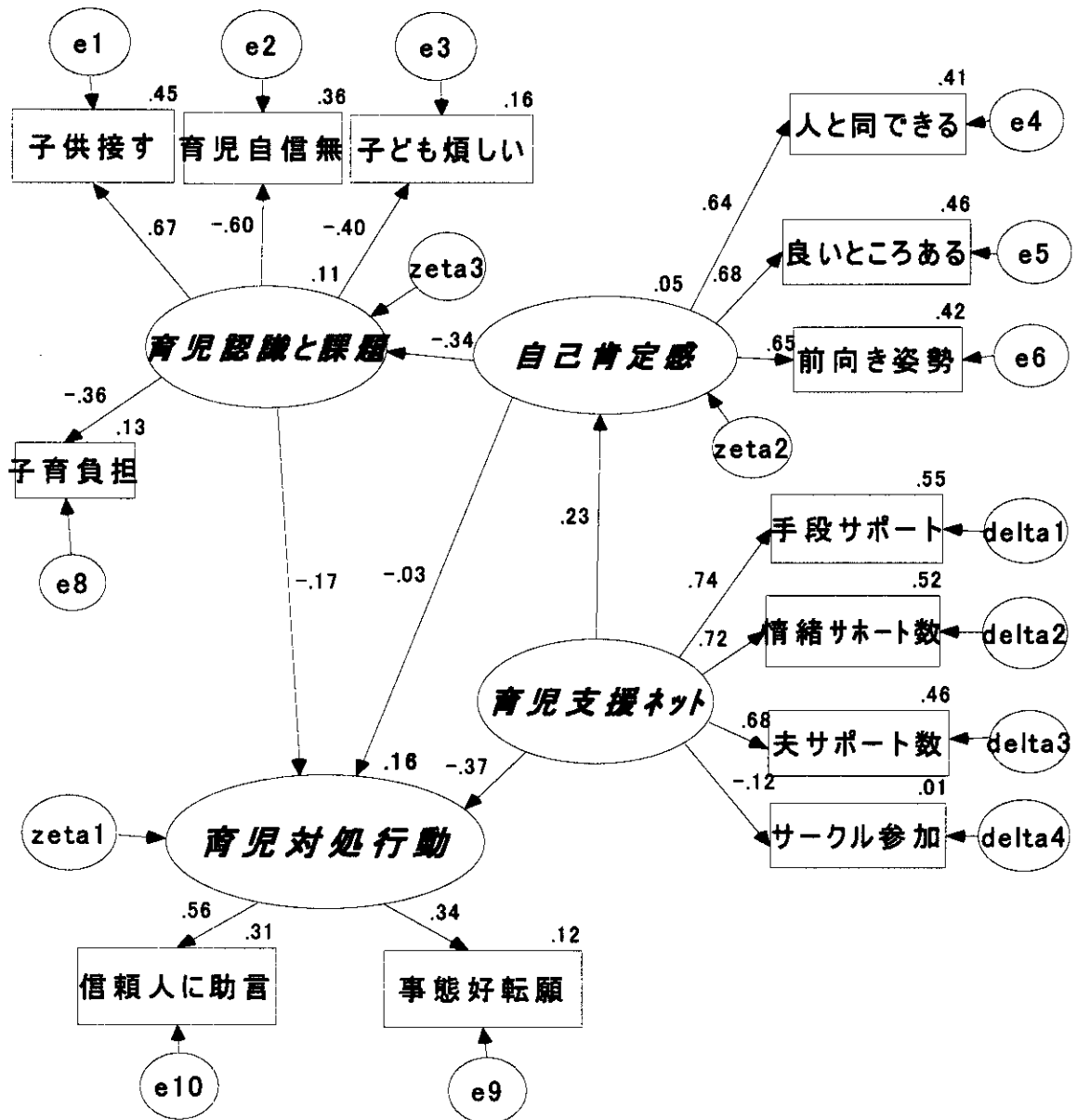
このモデルでは、外的な潜在変数「**育児対処行動**」は、育児過程で出会う様々な育児課題に対し、個々人の「**自己肯定感**」を背景に「**育児支援ネット**」基盤を活用し、好ましい「**育児認識・自信**」によって規定されるという仮説モデルである。育児対処行動モデルを図のように示した。

## 育児対処行動モデル



### 3-2) 育児課題と対処行動規定要因モデルの標準化推定数

育児課題と対処行動規定要因モデルに基づいて分析した。適合度が最も高かったモデル図を以下に示す。このモデルの適合度は、NFI が 0.937、RMSEA が 0.027 と高い適合度が得られた。



NFI=0.937 RMSEA=0.027

### 3-3) 育児課題と対処行動規定要因モデル分析結果の解釈

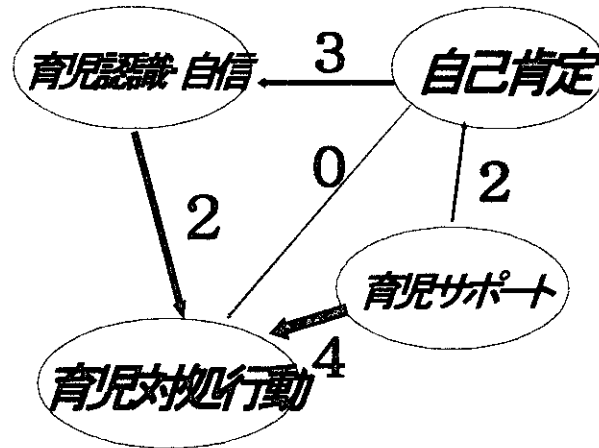
各潜在変数と観測変数との関連を得られた標準化推定値によって、以下のように解釈した。

潜在変数（育児サポート）は、主として、「夫のサポート数」、「手段的サポート数」、「情緒的サポート数」によって構成され、育児サークル参加より大きな標準化推定値を示した。

## 育児対処行動規定要因モデル

潜在変数（自己肯定感）は、主として、「自分には良いところがある」、「前向きな姿勢で望んでいる」、「人と同じようになれる」という観測変数で構成されていた。

潜在変数（育児認識と自信）は、主として「育児に自信がある」、「子どもどのように接するかかわからず」によって構成されていた。潜在変数（育児対処行動）は、主として「信頼できる人に助言を求め、それに従った」「事態が好転する事を願ったり、空想した」によって構成されていた。



各潜在変数間の関連をみると、（育児サポート）は、（自己肯定感）よりも（育児対処行動）をかなり規定していた。（育児認識と自信）は、（自己肯定感）からかなり規定されていたが、潜在変数（育児対処行動）に対しては、あまり規定していなかった。

以上の分析結果から見て、育児対処行動を推進させていくためには、育児サポートを強化していく重要性が示唆された。

このような仮説を実証していくためには、このような支援活動を続けることによる支援効果を明確にしていく実証的な介入追跡調査研究が必要だと考えられる。図に示した矢印は、共分散構造分析の標準化推定値の大きさを矢印の太さで示した。数字は、標準化推定値を10倍した数字の絶対値である。